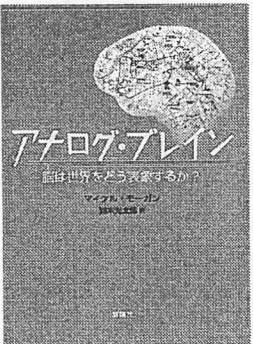


マイケル・モーガン著

科学というと、一枚岩のように思われがちだが、実際には様々な流儀がある。現在注目を集めている脳科学も、立場や方法論によって様々な学風が存在する。

もちろん、最後は一つの真実を求めて探究していることに変わりはない。ただ、何に着目するか、どのようなことを大切に思うかが違つのである。文化としての多様性や奥行きを知ることが、科学に親しみを持つ上で大切なきっかけになるだろう。

著者のマイケル・モーガン教授は、イギリスの経験主義科学の最良の伝統を受け継いでいる研究者の一人である。声高に自説を主張するというよりは、事実静静地に語るスタイル。ユーモアの精神も欠かせない。イギリス留学中に何度かその講演に接した思い出がよみがえり、思わず微笑んだ。脳というと、最近では意識や心



(鈴木光太郎訳、新曜社・三六〇〇円)

▼著者はロンドン市立大学教授で視覚研究の第一人者。王立協会会員。専門は実験心理学と認知神経科学。

## 脳の本質、「視覚」の観点から考察

の問題がクローズアップされる。物質である脳にいかにして心が宿るのか、様々な質感(クオリア)がいかにか生まれるのかという謎はかけ値なしの難問とされる。モーガン教授は、このような問題の重要性は認めつつも、脳にかかわる基本的な事実に戻って考えることを主張する。すなわち、脳は人類が作りだしたデジタル・コンピュータとは異なる、アナログ・コンピュータであるという事実である。神経細胞が活動し、お互いに影響を与え合い、計算が行われていく。そのプロセスの詳細を、専門の視覚を中心に議論する部分は本書の「背骨」であり、読んで示唆を受ける点が多い。

「アナログ」は「デジタル」と原理的に異なるのか？ コンピュータの上に実装された人工知能は、やがて意識を持つに至るのか？ 本書はこれらの概念的問いには、深入りしない。知られている実験事実を、あくまでも丹念に追っていくだけである。

事実を持って語るという態度は、日本ではなかなか定着しない。イギリス経験主義の本当の奥行きを、日本人はまだ知らない。科学的思考が経済や政治の世界においてもますます必要とされている現代において、本書は貴重な「文化の伝道師」たるはずである。